長崎大学　教育開発推進機構紀要　第 12 号　2022 年 3 月

わが国におけるラーニングコモンズを利用した正課教育の現状に関する考察

辻　高明
長崎大学 大学教育イノベーションセンター

The Actual Situation of Regular Education at Learning Commons in Japan

Takaaki TSUJI
Center for Educational Innovation, Nagasaki University

Abstract

The purpose of this study is to consider the actual situation of regular courses at Learning Commons in Japan. At first, the literature survey revealed that 12 courses were held at Learning Commons. As a result of case study, academic skill education for first-year students was the most common, and the second was librarian education for students who wished to be librarians. However, regular courses at Learning Commons existed in all curriculums of liberal arts education, specialized education, and graduate school education. As educational method, regular courses at Learning Commons have used methods such as active learning and project-based learning. It was suggested that the advantage of courses at Learning Commons is that "resources for communication" such as tools necessary for presentation and discussion and "resources for media" such as tools necessary for producing booklets and video contents can be used there. In addition, Learning Commons is open to the local community people and has the potential to create new educational practice through contact with the people outside university. It was suggested that the openness and view of the Learning Commons is generally an advantage in educational practice, but sometimes hinders the concentration of students.

Key Words : Learning Commons, Regular Education, Resources in Learning Environment, Literature Survey

1. 問題設定と研究目的

ラーニングコモンズ（以下 LC）を設置する大学が全国で年々増加している。LC は、大学が、学生の授業時間外での主体的な学習や正課外での自主的なグループ活動などを支援する上で重要な環境となっている。そして、LC の増加に伴って、LC に関する調査報告、実践報告も増加している。

例えば、浜島ら（2015）は、LC の高頻度利用学生への調査から、彼らの利用実態と学習特性を明らかにしている。また、鈴木ら（2015）は、LC を利用する学生への調査から、LC のエリア使用状況、とりわけ、学習相談エリアの利用状況について報告している。また、木原ら（2019）は、LC を利用する学生層、学部・学年別の利用の特徴について述べている。さらに、岩崎ら（2018）は、全国の大学が LC をどう評価しているのか総括的に分析し、その結果、LC の利用動向を明らかにする調査が最も多く、全体の約半数を占める一方、学生の学習成果を明らかにする調査は限られていると指摘している。そして、現在の LC の調査は、大学が「学生がどう LC を利用しているのか」を把握しようとするものが中心的であると述べてい

る。そのように、LC の調査として学生の利用動向を把握するものが中心的である背景には、LC は、学生が正課外に個人やグループで自発的・主体的に利用する場であるという前提がある。

一方で、LC に関して授業実践のための利用に関する調査報告、実践報告は少ない。岩崎ら（2021）は全国の 4 年制大学への調査において、「授業に関わる学習支援」の内容を分類しているが、授業に関わるものの中でも、そのほとんどが「授業に関連するセミナーや個別指導の実施」や「授業に関連する図書・資料利用の促進」である。つまり、多くの学生は、授業の予復習や授業課題に取り組む場として LC を利用しており、そうした結果からも、LC を利用した授業実践そのものの少なさが窺える。

確かに、LC は、第一義的には、正課外の時間における学生の学習支援のための環境である。しかし一方で、LC は、身分や学年にかかわらず誰でも利用することができ、また、校舎における通常の教室（講義室やセミナー室）には必ずしも完備されていないさまざまなリソース（resource）が備え付けられているなど、新しい教育的可能性を持った環境でもある。なお、ここでいうリソース（resource）とは、「人間が学習活動する際に，個々の場面に応じてその都度利用し参照する資源」（Lave, J., & Wenger, E. 1991）を指す。LC には、什器類や情報機器などの物理的道具、学習材などのアカデミックリソース、スタッフなどの人的リソースなど様々なリソースが存在しており、それらを効果的に利用することで、新しい教育的可能性を拓くことができると考えられる。

大学の正課授業において、教員による知識伝達型の教育方法だけではなく、アクティブラーニングや PBL（Project Based Learning）による知識構成型の教育方法を用いることの重要性が指摘されて久しい。通常の教室も、最近では、机・椅子を可動式にしたり、ホワイトボードを置くなど、従来の一斉授業のための固定式の講義室とはかなり様相が異なる教室も増えてきているが、LC こそ、本来的に PBL やアクティブラーニングの教育実践に馴染む環境である。つまり、教員が、LC の特徴や LC 環境の充実したリソース（resource）を効果的に利用することで、校舎における通常教室（講義室、セミナー室）では実践しにくい授業実践、ないしはより効果的な授業実践の展開が期待できる。

以上より、LC の環境やリソース（resource）を利用した授業実践に関する研究知見を見出すことは大学教育における重要課題といえる。そこで、本研究では、LC で行われている正課の授業に着目して文献調査を行い、LC で実施されている正課授業に関する現状を整理することを目的とする。

2. 研究方法

CiNii を活用した論文検索による文献収集の方法を用いる。CiNii で「ラーニングコモンズ」と論文検索すると、2022 年 2 月 25 日時点で 496 件の文献（学会発表，紀要，雑誌記事，論文）が表示された。本研究は、LC で正課として行われている授業実践の現状を整理することが目的であるため、「ラーニングコモンズ」に関連ワードを加え、①「ラーニングコモンズ　授業」、②「ラーニングコモンズ　科目」、③「ラーニングコモンズ　教員」とそれぞれ検索して、文献を収集した。①、②は、LC における授業に関する文献を収集すること、加えて③は、授業は教員が行うものであるため、LC と教員に関連した文献を収集することを目的とした。その上で、LC を利用した授業に関する文献を整理した。

3. 結果と考察

3.1 文献の検索結果と整理

CiNii での論文検索の結果、①「ラーニングコモンズ　授業」では 39 件、②「ラーニングコモンズ　科目」では 7 件、③「ラーニングコモンズ　教員」では 14 件の表示結果であった（2022 年 2 月 25 日時点）。

文献整理の手続きとして、まず、①「ラーニングコモンズ　授業」の検索結果は 39 件であったが、その中には、ヒットはしたものの、LC を利用した授業実践に関する文献ではないもの（例えば、「ラーニングコモンズでの授業支援システム」といった文献）も含まれているため、一つずつ文献の

内容を確認し、具体的に授業の内容や方法について述べられた文献であるかを精査した。その結果、①では 10 件（9 事例・9 大学）が LC を利用した授業実践に関する文献に該当した。次に、②「ラーニングコモンズ　科目」の検索結果は 7 件であり、全てが授業実践に関する文献であった。しかし、そのうち 5 件は、上記の①の検索結果の 10 件と重複しており、結果として、②では 2 件（2 事例・2 大学）が新たに LC を利用した授業実践に関する文献として加わった。さらに、③「ラーニングコモンズ　教員」の検索結果は 14 件であったが、その中には LC を利用した授業実践に関する文献ではないもの（例えば、「ラーニングコモンズでの教員の協力」といった文献）も含まれており、具体的な授業の内容や方法について述べられた文献は 4 件であった。そのうち 3 件は①または②の検索結果と重複しており、結果として、③では 1 件（1 事例・1 大学）が新たに LC を利用した授業実践に関する文献として加わった。

以上より、最終的に 13 の文献、12 事例（12 大学）をこれまでに LC で行われている正課の授業実践とし、本研究の分析対象とした。

3.2 事例の整理と分析

12 事例全てについて、各授業の概要を整理し、それぞれの LC 利用に関する特徴を分析する。

(1) 事例①：A 大学における授業

A 大学では、初年次対象の共通教育科目「大学・社会生活論」の中の 1 コマで「大学図書館の利用法」、「データサイエンス基礎」の中の 1 コマで「学術情報の探し方」を図書館職員が主担当となって行っている。主に図書館オリエンテーション的な内容と情報検索法の基礎的な内容を扱っている（橋 2020）。

＜分析＞

本事例では、教育対象は初年次学生、教育内容は図書館の利用や情報検索に関するものである。正課の授業ではあるがその中の 1 コマを利用して、教員ではなく図書館職員が授業を行っている点が特徴である。LC の授業での利用に関しては明確には論じられていないが、正課外に図書館職員が中心となって、LC などを利用し、図書館主催のセミナーやレポート作成基礎講座などを積極的に開催している。

(2) 事例②：B 大学における授業

B 大学では、「わくほくメディアラボ」と呼ばれるラーニングコモンズにおいて、そこに居る学習コンシェルジュと呼ばれる教員が、学内の科目担当教員と連携しながら「学習コンシェルジュ連携科目」を行っている。（高ら 2018）。

＜分析＞

本事例では、LC に教員を配置していること、また、その教員と学内の科目担当教員との連携により授業を実施している点が特徴である。

(3) 事例③：C 大学における授業

C 大学では、図書館司書課程における「図書館情報資源特論」の授業で LC を利用している。具体的には、冊子体をグループワークで作成する活動、特に、コンテンツの資料や素材があり、パソコンを使用して原稿を作成する上で必要な用具がそろっているため図書館の LC（C 大学ではアクティブラーニングコモンズと呼んでいる）を利用している（設楽 2018）。

＜分析＞

本事例では、受講生の学年・学科はバラバラであるものの、図書館司書課程の授業で LC を利用している点が特徴である。特に、冊子の作成や編集など、PC を使う上で LC が有益であることが窺える。

(4) 事例④：D 大学における授業

D 大学では、「社会文化心理学」の授業でラーニングコモンズを利用している。この科目は、PBL などのアクティブラーニングの手法を用いて学生自身が大学内に若者文化を生成することを通じて、リテラシーやコンピテンシーといった様々なジェネリックスキルを育成するための教育実践である。それはプレゼンテーションやディスカッションだけでなく、地域のインフルエンサーや専門家によるゲストトークやフィールドワークを取り入れている授業である（奥田 2018）。

＜分析＞

本事例は、LC において、プレゼンテーションやディスカッションを取り入れるだけでなく、地域社会からゲストを招き、ゲストによるトークを行っている点に特徴がある。

(5) 事例⑤：E 大学における授業

E 大学では、福祉教育授業における導入部分のモデル動画コンテンツの作成を、ラーニングコモンズを活用して行っている（安倍ら 2017）。

＜分析＞

本事例からは、LC の環境が、動画コンテンツの作成・編集を行う教育実践と符合的である可能性が示唆される。

(6) 事例⑥：F 大学における授業

F 大学では、教養的科目「自然科学論 I」において、アクティブラーニングによりキー・コンピテンシーを涵養している。そのために、ラーニング・コモンズの環境強化が必要であると述べている（溝口 2017）。

＜分析＞

本事例からは、LC が、教養教育におけるコンピテンシーの涵養や、アクティブラーニングの実践のために適合する教育環境であることが示唆される。

(7) 事例⑦：G 大学における授業

G 大学では、図書館のラーニングコモンズ（ラーニング・スクエアと呼ばれている）のオープンなスペース「グループ学習スペース」において、大学院生対象の授業科目「ザ・プレゼンテーション」を実施している。受講生への調査の結果、ラーニング・スクエアは、開放的で立ち寄りやすいという点が評価されている一方で、周囲の目や音が気になるため授業への集中が妨げられるという側面もあり、活発な議論や発表の場として活用するには課題が存在することを指摘している（松原ら 2017）。

＜分析＞

本事例では、教育対象が大学院生で、教育内容はプレゼンテーションの訓練である。LC の環境についての調査結果を踏まえ、開放的ではあるが、周囲の目や音が気になるという LC の負の側面も指摘されている点が特徴である。

(8) 事例⑧：H 大学における授業

H 大学では、司書課程科目「児童サービス論」の通常講義をアクティブ・ラーニング・スタジオを使用し実施している。図書館の変化に伴い、司書の役割も変化するため、メディアファシリテーターを育成する必要があることを指摘している（平井ら 2015）。

＜分析＞

本事例では、図書館の変化に対応できる司書の育成ための教育実践（司書課程科目）のために LC を利用している点に特徴がある。

(9) 事例⑨：I 大学における授業

I 大学では、老年看護学の演習において，紙上患者の看護課題に対して、パーソナルワーク、グループワークを経て、プレゼンテーションとタブレット端末利用による実践を、アクティブラーニングコモンズを活用して行っている。そして、アクティブラーニングコモンズに関して、学生らは主体的な授業参加ができる一方、ツール活用に関する戸惑いがあることを指摘している（岡田ら 2015）。

＜分析＞

本事例は、教育対象が看護系の学生である。タブレット端末を用いたアクティブラーニングのために LC（アクティブラーニングコモンズと呼ばれている）を利用していることが分かる。

(10) 事例⑩：J 大学における授業

J 大学では、ラーニングコモンズに在駐している教員が実施する正課外のアカデミックスキルセミナーに出席した学生には、一部学部の特定の正課科目の成績評価で点数が加点される仕組みになっている（鈴木ら 2016）。

＜分析＞

本事例では、教育対象は主として初年次学生であり、教育内容はアカデミックスキルである。ラーニングコモンズの運営部局と学部教育との連携に関する事例ということができる。

（11）事例⑪：Ｋ大学における授業

K 大学では、短期大学生に、情報系学科でのプログラミング教育を、ラーニングコモンズを利用して実施している。そして、ラーニングコモンズを利用した PBL の取り組みによって、机上の学習だけではなく、より実践的なプログラミング能力の習得と、コミュニケーション能力の育成を図ることができると報告されている（澤口 2012）。

＜分析＞

本事例は、教育対象は短期大学生、教育内容はプログラミング教育である。プログラミング教育を PBL 形式で行うために LC を利用していることが分かる。

（12）事例⑫：Ｌ大学における授業

L 大学では、小学校教師を目指す学生が、外国語活動および外国語を指導できる力を身につけるために、教室で使える英語表現を身につけ、歌やチャンツなどのアクティビティ、ICT の活用等、英語を主体的に学ぶ活動を通して、実践力や指導力を育成させる授業をラーニングコモンズで行っている。電子黒板ソフトを利用した小学校における英語の授業を見据え、ラーニングコモンズの環境を利用することで､実際に電子黒板を使用させ、電子黒板の特徴や利点を学ばせている（浅井ら 2017）。

＜分析＞

本事例は、小学校教員養成課程を持つ大学の授業実践である。LC の環境で電子黒板の機能を体験させ、将来、ICT を利用したり、アクティビティを伴う授業実践を行うことができる教師の育成を目指した授業である。

3.3 全事例からの考察

全 12 事例の整理と分析をもとに、LC を利用した授業実践の現状と特徴について､「対象学生と教育内容」､「教育方法とリソースの利用」､「LC で授業を行うことの意義と課題」の観点から考察する。

（1）対象学生と教育内容

教育内容として、まず、情報検索やレポート作成、ディスカッションやプレゼンテーションといったアカデミックスキルに関連した授業が多く見られ（事例①、④、⑦、⑩）、対象学生は、多くは教養教育や初年次教育の科目を受講する初年次学生が中心であったが（事例①、④、⑦）、大学院生も見られた（事例⑩）。

次に、図書館司書課程など、図書館に関する専門的内容を教育するために LC を利用した授業が複数見られ（事例③、⑧）、対象学生として、図書館司書を目指す学生、ないしはそれに関心を持つ学生であることが窺われた。

さらに、福祉教育、看護教育、英語教師教育といった専門的な教育内容に関連した授業も 1 事例ずつ見られ（事例⑤、⑨、⑫）、専門的な仕事を目指す、ないしはそれに関心を持つ学生を対象としていることが窺われた。なお、教養・専門・大学院のどの教育課程においても、LC 利用の授業は存在した。

（2）教育方法と「リソース（resource）」の利用

教育方法としては、アクティブラーニングや PBL 形式といった方法を用いている授業がほとんどであったが、特に、冊子や動画といったコンテンツの制作活動を伴う授業（事例③、⑤）や、タブレット端末や電子黒板などの情報端末・機器を使用する授業（事例⑨、⑪、⑫）が、LC で行われていた。

プレゼンテーションやディスカッションを行うアクティブラーニングでは、プロジェクターや可動式の机・椅子といった「コミュニケーションのためのリソース」が利用され、また、コンテンツの制作活動及び情報系に関連する教育内容においては、情報機器・端末など「メディア系のリソース」が用いられていることが分かった。

（3）LC で授業を行うことの意義と課題

LC で授業を行うことの意義は、上記（2）でも述べたが、LC 環境は、プレゼンテーションやディスカッションなどコミュニケーションを土台とするアクティブラーニングを実践しやすい「コミュニケーションのためのリソース」がある点、さらに、情報機器・端末といった「メディア系のリソース」を用いた実践が展開しやすい点にあると考

えられる。通常の教室では、可動式の机・椅子、プロジェクターやホワイトボードはあっても PC まで備わっていることは稀である。また、学内の PC ルームは、PC の台数は多いものの机・椅子は固定され、学生間のコミュニケーションには不向きなケースが多い。LC は、その両方の側面を兼ね備えた環境であるといえよう。

また、図書館や LC は、地域社会にも開かれていることが多い。事例④では、地域のゲストスピーカーによるトークが授業に取り入られていた。もちろん、地域のインフルエンサーや専門家を招いたトークは、通常の教室でも LC でもどちらでも実施可能であるが、より地域社会の人たちにも開放された場である図書館や LC では、今後、地域社会との接点を持つ教育実践の展開が期待される。

文献の検索結果とその整理からも明らかなように、現在、LC を利用した正課の授業実践は決して多くない。しかし、それに参加した学生は、LC の存在や機能を知ることになるため、その後の自主的、主体的な学習活動のための LC 利用も期待できるだろう。

次に、LC で授業を行う上での課題として示唆されたこととして、LC の運営部局から見た場合、学部教育・教員との連携が必要という点が挙げられる。事例②、⑩は、LC に在駐している教員が、学部の教員と連携して学部教育の授業に貢献している事例であった。辻（2021）は、正課外に LC で学生向けのアカデミックセミナーを開催しても、必ずしも十分な参加学生が集まらないことを指摘している。その意味で、LC で正課外の教育実践を行う場合、正課の学部教育との連携が一層必要と考えられる。

また、LC の環境的特性に関わる課題として、事例⑦の大学院生向けのプレゼンテーションの訓練の授業において、LC は開放的で立ち寄りやすいが、周囲の目や音が気になるため授業への集中が妨げられるという点が指摘されていた。この事例からは、LC の開放性や立ち寄りやすさが、発表や議論の活動において負に作用することもあることが窺える。よって、活動の種類によっては、通常の教室の利用や、LC の中でも閉ざされたグループ学習室などの利用の検討が必要であることも示唆された。

4. まとめと今後の展望

本研究では、LC を利用した正課の授業に関する文献調査を行い、全 12 事例について分析し、それを踏まえ、LC を利用した授業実践の現状と特徴を考察した。とりわけ、「対象学生と教育内容」、「教育方法とリソース（resource）の利用」、「LC で授業を行うことの意義と課題」の観点から考察した。

その結果、初年次学生を対象としたアカデミックスキル教育の授業が最も多く、次に、図書館司書を目指す学生を対象とした司書教育の授業が続いた。教養・専門・大学院のどの教育課程においても LC を利用した授業は見られた。教育方法としては、アクティブラーニングや PBL 形式の方法を用いている授業がほとんどであったが、プレゼンテーションやディスカッションを行う授業だけでなく、コンテンツの制作活動を伴う授業やタブレット端末、電子黒板など、情報端末・機器を使用する授業も多く存在した。LC の「リソース」として、プレゼンテーションやディスカッションを行う授業では「コミュニケーションのためのリソース」が利用され、制作活動や情報端末・機器の使用を伴う授業では「メディア系のリソース」が利用されていた。そして、そうした両側面のリソースを兼ね備えた環境である点が、通常の教室や PC ルームとは異なる LC の特徴であることを述べた。さらに、地域社会に開放され、社会と接点を持つ教育実践の創造が期待できることも LC の利点になる可能性を指摘した。

LC で授業を行う上での課題としては、LC のスタッフが正課外の教育実践を行う場合、正課の学部教育・教員との連携が重要であることを述べた。さらに、LC 環境の開放性や立ち寄りやすさは必ずしも良いことばかりではなく、発表や議論の活動において学生の集中の妨げになることもあるため、活動の種類によっては、通常の教室の利用や、LC の中のグループ学習室などの利用がよい場合もあることに言及した。

今後は、LC を利用した教育実践として、正課の授業だけでなく、正課外で教職員が企画・実施している学生向けのプロジェクトやセミナーなどの

教育実践にも分析の対象を広げたい。また、LC の形態に着目し、図書館に併設されている LC と図書館から独立している LC の間で、実施されている教育実践の内容や方法の違いがあるかどうかについても分析対象を広げ、教育のための環境としての LC の実態と可能性について明らかにしていきたい。

参考文献

浜島幸司, 鈴木夕佳, 岡部晋典（2015）「良心館ラーニング・コモンズ高頻度利用者の学習特性」同志社大学学習支援・教育開発センター年報 6 号、pp:3 – 27

鈴木夕佳, 岡部晋典, 浜島幸司（2015）「利用実態からみるラーニング・コモンズの学習行動 ： 学年別の差異に着目して」同志社大学学習支援・教育開発センター年報 6 号、pp:51-73

木原宏子, 浜島幸司（2019）「同志社大学ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズにおける学習支援の実践と課題 ： 理系学生の多いキャンパスでのラーニングコモンズ開設初期の取組」、同志社大学学習支援・教育開発センター年報 10 号、pp:30-40

岩﨑千晶, 川面きよ, 村上正行（2018）「わが国におけるラーニングコモンズの評価動向に関する考察」日本教育工学会論文誌 第 42 巻(suppl.)、pp.157-160

岩﨑千晶, 川面きよ, 遠海友紀, 村上正行（2021）「我が国の 4 年生大学におけるラーニングコモンズの学習支援に関する現状」日本教育工学会論文誌 45(suppl.)、pp:197-200

Lave, J., Wenger, E. : Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation. Cambridge University Press, New York, 1991.

橋洋平（2020）「金沢大学附属図書館における利用教育・学修支援活動の成果と課題」大学図書館研究 115 巻、pp: 2068-1－2068-9

高シュウ, 藤田真依, 安藤友晴, 石橋豊之（2018）「小規模大学におけるラーニング・コモンズの一取り組み事例 ～稚内北星学園大学の事例報告 2, 応用的側面を中心に～」稚内北星学園大学紀要 (19), pp: 61-75

設樂馨（2018）「図書館司書課程における新図書館を活用したアクティブ・ラーニング授業の展開」京都女子大学図書館情報学研究紀要 (005), pp:29-38

奥田雄一郎（2018）「社会文化心理学 ： まちなか学生プロジェクト ： まちなか若者文化生成のための心理学的実践(1)」共愛学園前橋国際大学論集(18), pp:261-278

安倍潤子, 宇坂徹, 片山達也, 廣田そよか, 西山樹, 佐野友香, 仁木智輝, 高橋眞琴（2017）「福祉教育授業モデル動画コンテンツの作成 ： ラーニング・コモンズの活用を手がかりに」鳴門教育大学情報教育ジャーナル(15), pp:1-6

溝口元（2017）「社会福祉学部におけるキー・コンピテンシーを念頭においた教養的科目「自然科学論Ⅰ」の展開」立正社会福祉研究 18(32),pp: 9-19

松原悠, 斎藤未夏, 石津朋之, 大山貴稔, 佐藤まみ子, 新村麻実, 野村港二（2017）「筑波大学中央図書館ラーニング・コモンズにおける大学院共通科目「ザ・プレゼンテーション」の実施」大学図書館研究 107, pp: 1703-1－1703-11

平井尊士, 設樂馨（2015）「2014 年度図書館におけるアクティブ・ラーニングの試み ―教育環境整備と司書課程の取組―」武庫川女子大学情報教育研究センター紀要 (23), pp:10-19

岡田初恵, 大谷順子（2015）「アクティブ・ラーニング・コモンズを活用した老年看護学の演習授業における学びの効果」旭川大学保健福祉学部研究紀要 7, pp:59-67

鈴木夕佳, 岡部晋典, 浜島幸司（2016）「学習支援と学部教育はいかに連携できるのか ： 良心館ラーニング・コモンズでのセミナー実践をもとにして」同志社大学学習支援・教育開発センター年報 7 号, pp:42-62

澤口隆（2012）「PBL 手法を用いたワークショップの実践とプログラミング教育 ： 湘北ラーニング・コモンズの活用」湘北紀要 (33), pp:147-162

浅井千晶, 棚次英美（2017）「電子黒板ソフトを利用した小学校英語の可能性：主体的な学びにつながる授業を目指して」千里金蘭大学紀要 14, pp:191−199

辻 高明（2021）「オンライン版アカデミックスキルセミナーの実践と課題」同志社大学 学習支援・教育開発センター年報 12 号、pp:35-41

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号 : 20K03189、代表者 : 辻 高明）の一環として行った。